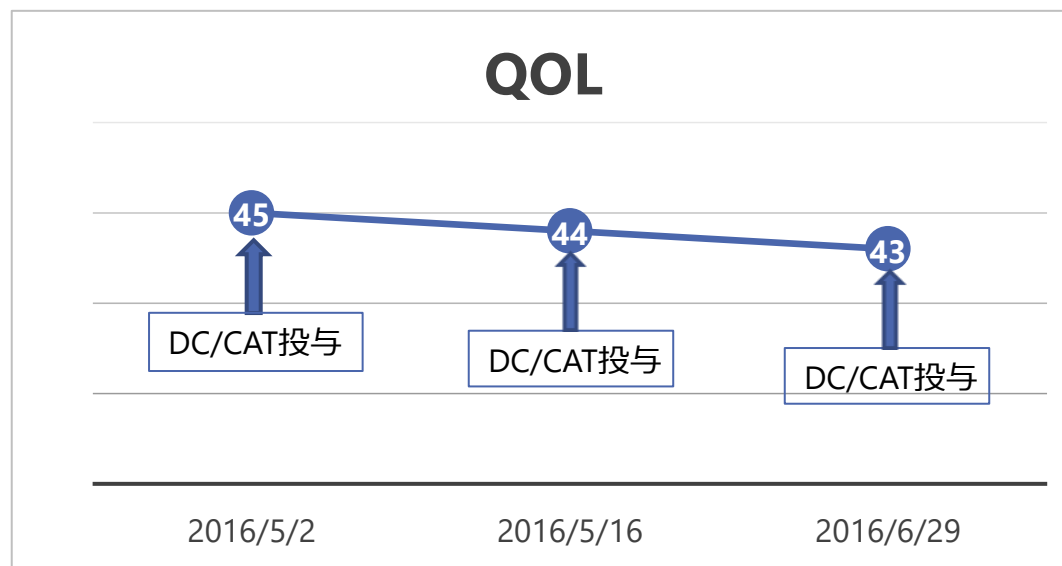


口腔内メラノーマ（犬）

- ▶ M.ダックスフント、15歳、♀
- ▶ 来院主訴：口腔内腫瘍の自壊、出血
- ▶ 発症日（推定）：2015年12月1日
- ▶ 手術歴：2015年12月6日（一部摘出）
- ▶ 2016年5月2日よりDC/CAT療法開始
- ▶ DC/CAT投与日：2016/5/2(CAT: 2.0×10^8 cells、DC: 4.0×10^5 cells)
2016/5/16(CAT: 2.3×10^6 cells、DC: 5.0×10^5 cells)
2016/6/29(CAT: 4.6×10^7 cells、DC: 1.0×10^5 cells)



DC(樹状細胞)：皮下リンパ節投与

口腔内メラノーマ（犬）

- ▶ 生化学検査：BUNの軽度上昇（35mg/dL前後）
- ▶ 2016年5月16日（2回目投与時）に小規模な局所再発を認めるがQOLは良好
- ▶ 最終投与（3回目）以降
 - ・2016年9月3日まで良好な経過
 - ・⇒徐々に腫瘍が増大したため、9月15日、11月14日：減容積手術（80-90%切除）
 - ・12月13日：左下顎骨の吻側1/3を含む腫瘍切除
 - ・以降、3カ月間再発もなく、良好
- ▶ 2017年3月7日：慢性腎臓病による衰弱で死亡

最終投与（3回目）投与前の状態
腫瘍切除の確認



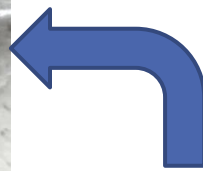
口腔内メラノーマ（犬）

▶ 獣医師コメント

- ・2016年5月2日の初回投与以降 食欲・元気ともに改善し、3カ月以上の間、残存している腫瘍病変の規模は不変であった
- ・以降、腫瘍の増殖による摂食障害と出血で3度保存的な手術を行ったが、いずれも日帰りが可能で翌日以降の回復も良好であった
- ・12月の手術時はやむを得ず下顎骨の一部を切除したが、回復は良好であった
- ・QOLも良好に維持できており、飼い主の満足度も高かった
- ・ほぼ同時期に口腔内メラノーマで肉眼的にほぼ同程度の患犬の治療を同じ方法で行ったがこちらは腫瘍の増大が急速で、初回手術後3カ月で亡くなってしまった（9歳のウエスティ）
⇒同ステージで同処置を行った2例でこれほど大きな差が出たのが年齢・雌雄・犬種といった、どのような要因に関連があるのか、今後の症例を見ながら検討していきたい

口腔内メラノーマ①（犬）

- ▶ M.ダックスフント、9歳、♀
- ▶ 来院主訴：食欲不振⇒身体検査で病変発見
- ▶ 発症日（推定）：2016年10月（身体検査にて）
- ▶ 減容積手術：2016年11月7日
- ▶ 術後疼痛管理のため鎮痛剤および抗生剤投与



術前患部写真

口腔内メラノーマ①（犬）

- ▶ 病理検査所見：病変でメラノファージの浸潤を伴って、豊富なメラニン顆粒を含有する多角形～紡錘形の腫瘍細胞が不規則に交錯しながら、または大小の胞巣状、散在性に増殖している
- ▶ 腫瘍の悪性度は低～中等度
- ▶ 2016年11月24日よりCAT療法開始（腫瘍の進行遅延を目的）



口腔内メラノーマ①（犬）

- ▶ 免疫療法は6回で終了し、経過観察中（平均投与数： 6.1×10^8 cells/body）
- ▶ 病理検査結果で悪性度もそれほど高くなく、早期発見で切除できた
- ▶ 局所再発、リンパ節転移、肺転移を示唆する所見なし（2017年9月21日現在）
⇒初診時より約1年が経過したため、再発転移のモニターも終了
- ▶ 血液検査：著変なし
- ▶ 食欲不振（来院時主訴）はリンパ球性形質細胞性胃腸炎に起因
⇒ステロイドおよび胃薬を処方（2017年1月に治療終了）

口腔内メラノーマ①（犬）

▶ 獣医師コメント

- ・本症例の診断としては、高分化型のメラノサイト腫瘍であり、細胞の異型性、分裂像から腫瘍の悪性度は低～中と診断された
- ・今回は、歯肉と下顎骨の一部を含めて切除を行い、病理診断では完全切除されていた
- ・低悪性度のため、外科的な完全切除のみで完治する可能性も期待できるが、高分化と診断されたものの中でも稀に悪性の挙動をとることがあるため、追加治療を検討する場合、免疫強化を目的として副反応が少ないCAT療法は一つの選択肢として考えることができると思われる

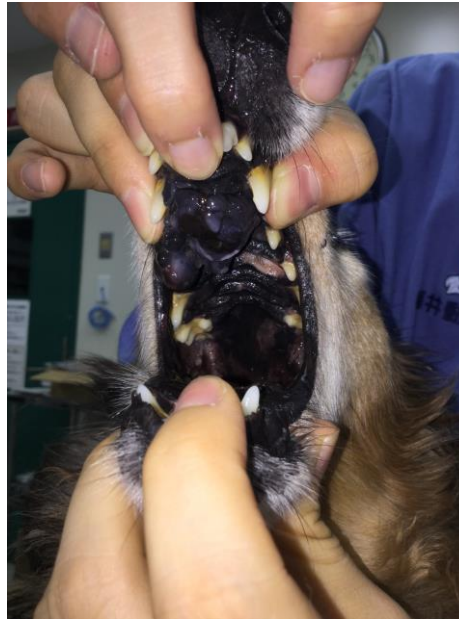
▶ 飼い主さまのご様子

- ・この飼い主さまは、過去に飼育されていた犬が若くしてリンパ腫で亡くなったため、腫瘍疾患に対して非常に神経質になられていた
- ・手術後の再発や転移の可能性を非常に心配されていたが、CATを行うことにより、治療をすることができること、そしてQOLが維持出来ている点で安心された様子だった

口腔内メラノーマ②（犬）

- ▶ M.ダックスフント、14歳、♂
- ▶ 来院主訴：口臭がする
- ▶ 発症日（推定）：2016年8月
- ▶ 2016/8/30：胸部X線にて肺転移が無いことを確認（初診日）
- ▶ 手術歴：2016年9月8日（減容積手術）
- ▶ 2016年9月22日よりCAT療法開始
- ▶ 減容積手術後に腫瘍の進行遅延を期待してCAT療法実施

口腔内メラノーマ② (犬)



初診時
(2016/8/30)



手術前
(2016/9/8)

口腔内メラノーマ② (犬)



減容積後2週目
(2016/9/22)

2016/10/22

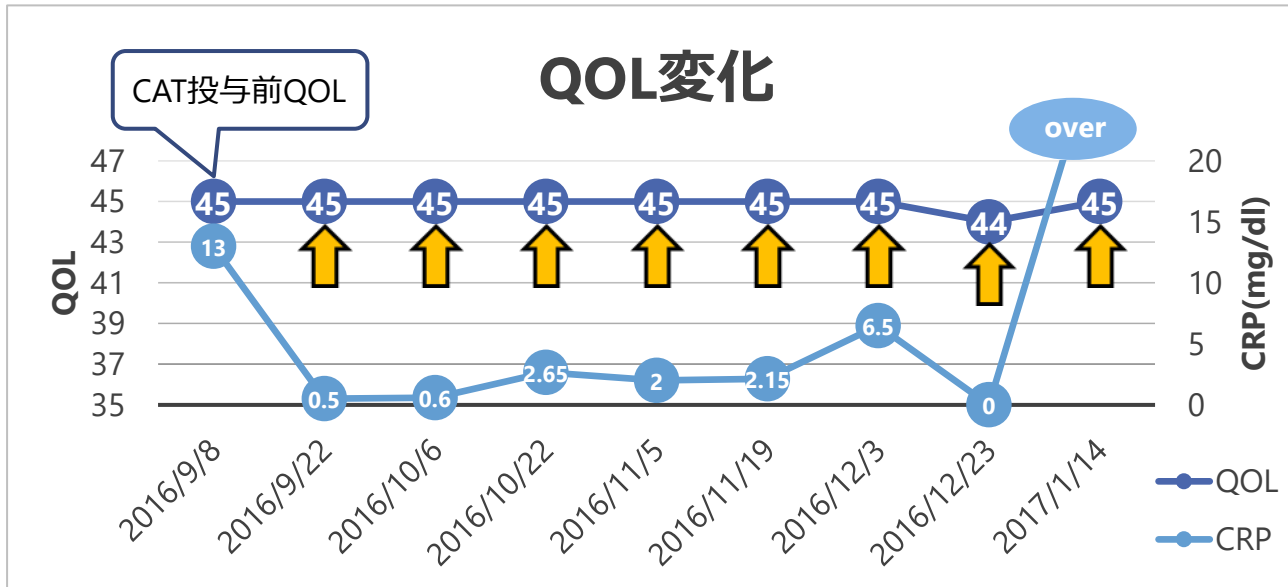
減容積手術後、粘膜の潰瘍状部分は
治らないものの、腫瘍の隆起はなし



再発所見
(2016/12/3)

口腔内メラノーマ② (犬)

▶ QOL変化



CAT投与細胞数

① 6.56×10^8

② 10.4×10^8

③ 0.55×10^8

④ 5.3×10^8

⑤ 1.7×10^8

⑥ 0.52×10^8

⑦ 5.77×10^8

⑧ 1.6×10^8

(cells/body)



CAT投与

- ▶ 2016/12/23 : 再発部位の増大 (1.5mm大)
- ▶ 2017/1/14 : 腫瘍増大 (上顎硬口蓋全面に広がり)
⇒ 腫瘍増大の進行速度が速い為、CAT療法終了
以降、患部の二次感染予防のため抗生物質投与のみ実施
- ▶ 2017/2 : 死亡

口腔内メラノーマ②（犬）

▶ CRPの高値について

- ・初診時にCRPが高く、減容積後は腫瘍の明らかな再発を認めるまでは、比較的低い値で推移しているため、腫瘍性の炎症と関連があると思われる
- ・12月3日には、病変部の臭い（壊死臭）が強くなったため、感染除去のため抗生物質を投与しており、その後一度低下が認められているため、12月23日の低値は、除菌による改善が得られた可能性がある
- ・1月14日の数値上昇に関しては、抗生物質使用中でありながら、著しい上昇を呈しており、本症例がそれから2週後に死亡していることから、腫瘍性の炎症（転移病巣での炎症や、腫瘍からのサイトカインなどによる全身反応など）が考えられる

口腔内メラノーマ②（犬）

▶ 獣医師コメント

- ・口腔内腫瘍の場合、転移により衰弱する前に、食事が摂れなくなったり、病変部の壊死や出血により著しくQOLが下がることが多く、本症例においても懸念された
- ・QOLを維持する目的で減容積手術を行った後、腫瘍の進行を遅らせるためにCATを実施
- ・腫瘍の外見からは悪性黒色腫が第一に疑われ、進行も速いと思われたため、術後1ヶ月もしないうちに腫瘍が増大する可能性も十分にあった
- ・結果としておよそ3ヶ月間、口腔内の腫瘍の明らかな進行を認めず、QOLを維持できた
- ・CAT療法は最終的な寿命の長さには顕著な延長をもたらすことはなかったと思われるが、QOLという点では効果的であったと考える

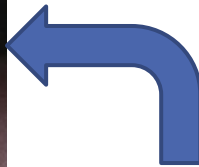
▶ 飼い主さまのご様子

- ・発見された時点で予後の見通しは良くなかったが、最後にしてあげられる治療があったこと、亡くなる直前まで散歩に行くことができ、苦しみ時間が短かったことに感謝していただいた

口腔内メラノーマ③（犬）

- ▶ ラブラドル・レトリバー、13歳、♂
- ▶ 来院主訴：左犬歯周囲の腫れおよび出血
- ▶ 発症日（推定）：2016年2月
- ▶ 手術歴：2016年4月2日（全摘）
- ▶ CAT療法開始前から比較的高いQOLを示していたが、全摘手術後の腫瘍進行の遅延を期待してCAT療法を開始
併用療法：サプリメント（マイタケ）
- ▶ 2016年4月から2017年3月までCAT療法を継続
計23回のCAT投与（平均CAT投与数： 9.36×10^8 cells/body）

口腔内メラノーマ③（犬）

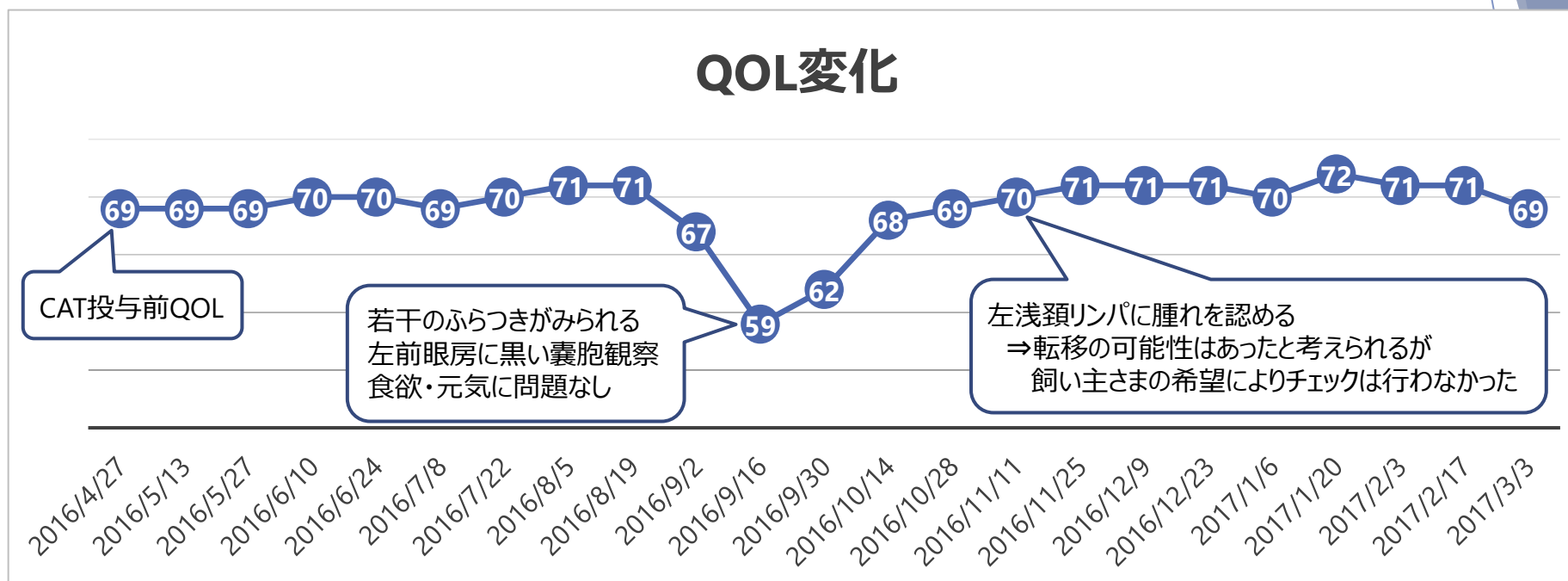


術前患部写真

- ▶ 病理検査所見：組織表面の広範囲に潰瘍化した歯肉の腫瘍細胞が観察される
増殖する腫瘍細胞は異形成ならびに多形性が高い多角形～一部短紡錘形の細胞で、
しばしば大型胞巣構造をとりながらシート状に増殖している

口腔内メラノーマ③ (犬)

▶ QOL変化



- ▶ 2017/3/3 : 23回目CAT投与 (QOL値 : 69point)
- ▶ 2017/3/13 : 嘔吐、3/14 : 黄疸、肝酵素上昇、3/16 : 腹水貯留
⇒飼い主さまの希望により対症療法のみ
- ▶ 2017年3月末 : 飼い主さまより患者死亡の連絡あり

口腔内メラノーマ③（犬）

▶ 獣医師コメント

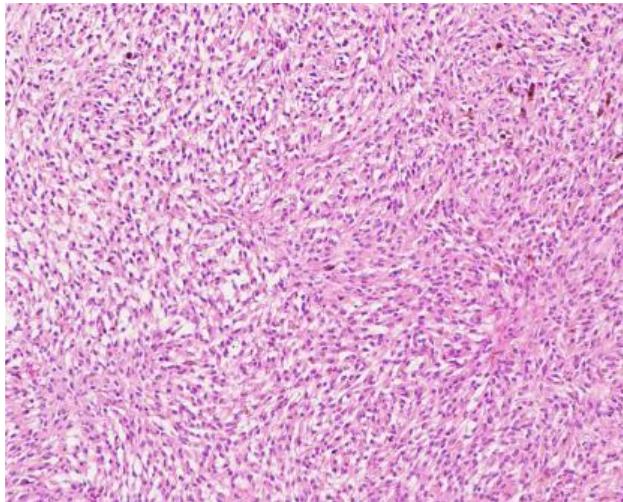
- ・最終的には、急性の嘔吐、黄疸、腹水貯留を認め亡くなったが、飼い主様のご希望により詳しい検査を実施していないため悪性黒色腫との関連は不明
- ・途中から転移を疑う所見が認められたが、局所再発は最後まで認めなかった
- ・およそ1年という期間、元気に過ごすことができ、悪性黒色腫では比較的長い予後であると考えられる
- ・比較的早い段階で、病変部を切除できたことも予後に関連していると思われるが、CAT療法によりQOLを維持し、比較的長い間、腫瘍の進行をコントロールできた可能性があると考えられる

▶ 飼い主さまのご様子

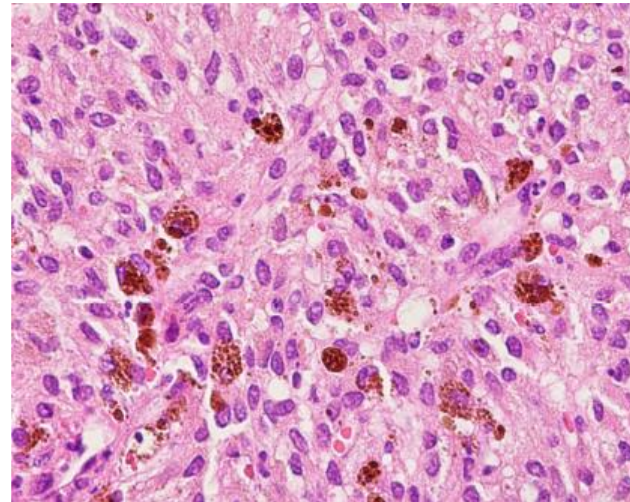
- ・最期の1年の間、元気に生活することができ、家族旅行など思い出を作ることができ、悔いが残らないように充実して過ごすことができたことに感謝していただいた

口腔内メラノーマ（犬）

- ▶ M.ダックスフント、15歳、♀
- ▶ 来院主訴：口の中にできものがある、軽度出血
- ▶ 発症日（推定）：2016年11月
- ▶ 病理検査実施：採取部位⇒左口唇内側腫瘍
- ▶ 病理組織診断：悪性黒色腫（メラノーマ）



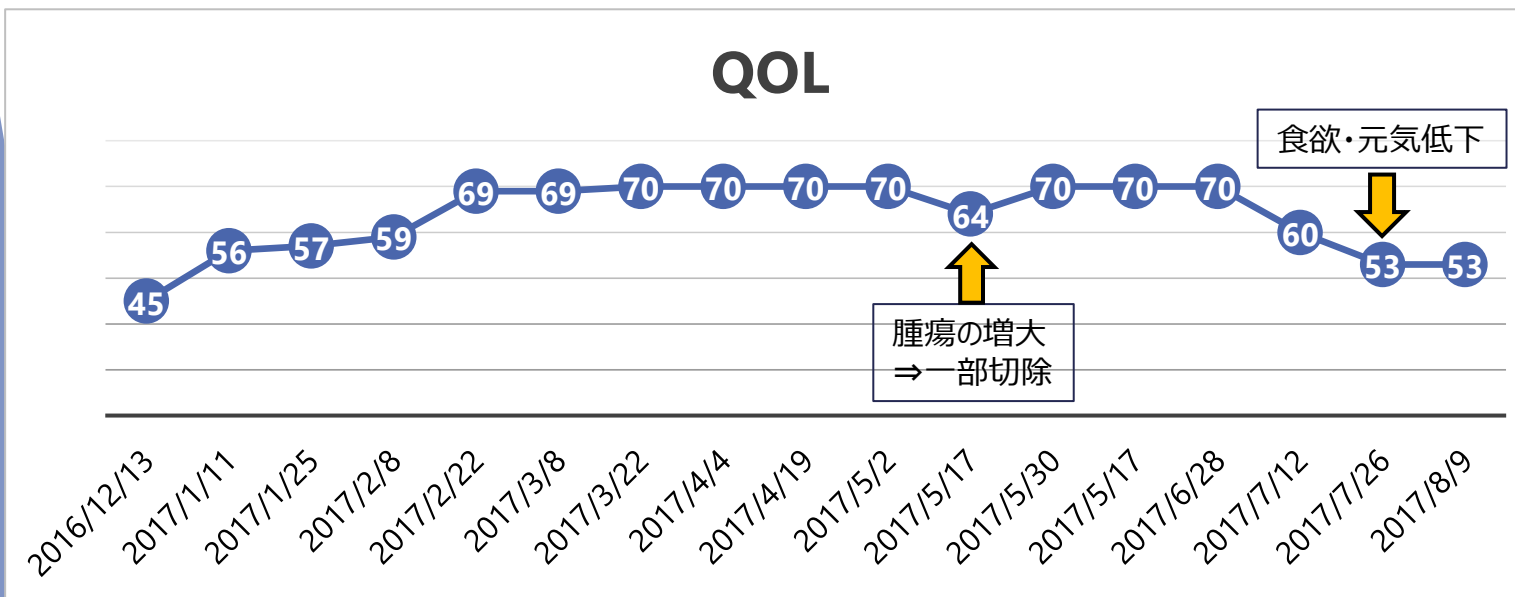
左口唇内側腫瘍（中倍）
採取組織に腫瘍病変を認め、メラニン産生細胞
に由来する腫瘍細胞が充実性に増殖する
腫瘍細胞には多形性を認める



左口唇内側腫瘍（高倍）
腫瘍細胞は好酸性に染色される少量～中等度
の細胞質とやや大小不同な類円形～楕円形の
核を有し、細胞質内にメラニン顆粒を容れる細胞
も混在する

口腔内メラノーマ（犬）

- ▶ 治療経過：2週間に1回のCAT療法を18回実施
- ▶ 期間：2016年12月13日～2017年8月9日（平均： 2.43×10^8 cells）
- ▶ 12回目投与時（2017年5月17日）：腫瘍の増大および軽度出血を認める
⇒局所麻酔にて一部切除（それまでは手術なし）
- ▶ 以降、増大および出血もなく維持されている
- ▶ 17回目投与時（2017年7月26日）：腫瘍に大きな変化はみられなかったが、老衰によるものと思われる元気・食欲の低下および腎機能の低下がみられるようになった
- ▶ 2017年8月18日：死亡



	7/26	8/9
BUN (mg/dl)	84.0	61.3
Cre (mg/dl)	1.4	0.7

口腔内メラノーマ（犬）

▶ 獣医師コメント

- ・病理診断結果および発生部位から悪性度の高い腫瘍であると考えられた
実際、腫瘍組織の増大もみられ一部切除の処置も行ったが、転移はみられず、CATの投与のみで進行もある程度抑えることができたと考えられる
- ・QOL評価（変化）に関しても、治療を行っていた慢性腎臓病の悪化や元気・食欲が低下する（17回投与時）まで高い数値を維持していた
また、QOL低下後も、CAT投与前より高いQOLを示していたためCAT投与によって、QOLが上昇・維持したと考えられる
- ・最終的には慢性腎不全の悪化等による食欲・元気の低下により死亡したが、飼い主さまもCAT療法に対して満足しているご様子だった